

恵みと平安があなたに

コリント人への手紙第二 1章 1-2節

はじめに

これまで月の第二週の説教では、「コリント人への手紙第一」からお話してきましたが、前回で読み終えましたので、今回から「コリント人への手紙第二」からお話していきたいと思います。

パウロは、「コリント人への手紙第一」を書いた後、コリント教会を訪問したり、手紙を書いたりしたようです。この手紙というのは、「コリント人への手紙第二」とは別の「涙の手紙」と呼ばれるものです。コリント教会の中には、パウロを批判する人たちがいて、教会をかき乱していたようです。そこでパウロは、テモテを遣わしたり、自ら訪問したりして、問題を解決しようとしたのですが、十分な解決が得られませんでした。そこで、「涙の手紙」をコリント教会に書いたり、今度はテトスを遣わしたりしました。

「涙の手紙」やテトスを遣わしたことによって、コリント教会の問題は少しずつ解決の方向に向かうようになりました。そこでパウロは喜びをもって、この「コリント人への手紙第二」を書いたのです。

この「コリント人への手紙第二」は、新約聖書に収められているパウロの手紙の中でも、最もパウロの人間性が表れている手紙だと言われます。パウロはこの手紙で、怒ったり、喜んだり、恐れたり、自分の感情をありのままに表しています。そしてパウロの牧会者としての苦悩や喜びが書かれています。その分この手紙は、愛に溢れ、気落ちしたり、悩んでいる人たちを慰め、励ます言葉に満ちていると言えます。

1. 手紙の差出人と受取人

まず1節を見てみましょう。「**神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ**」。ここには、この手紙の差出人と受取人が書かれています。この手紙は、パウロとテモテによって書かれ、コリント教会とアカイア地方全体のクリスチャンに宛てて書かれたものです。

(1)使徒

ここでパウロは、自分のことを「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒」と書いています。「使徒」というのは、「遣わされた者」という意味です。イエス様はまず御自分の弟子たちを「使徒」とされました。そしてイエス様の十字架と復活の目撃者、証人として、彼らを全世界に「遣わされた」のです。そして彼らを通して、全世界に「教会」を建てようとしたのです。パウロは、イエス様の直接の弟子ではありませんでしたが、復活のイエス様から直接、「使徒」として任命され、特に異邦人に向けて、イエス様の十字架

と復活の証人とされ、アジアやヨーロッパに次々と「教会」を建てていったのです。

パウロは、自分のことを「使徒」、「遣わされた者」と呼び、決して自分の意志で福音を宣べ伝えているのではなく、あくまでも「神様のみこころによって」、イエス様に「遣わされた者」に過ぎないと考えていたのです。

現代の教会には、「使徒」はいません。「使徒」は、あくまでもイエス様の直接の弟子であり、さらにイエス様の十字架と復活の目撃者、証人であり、イエス様から直接「使徒」として任命された者に限られるからです。しかし神様は、現代の教会にも、御自身の働き人を遣わされます。「牧師」は、中会に属していますが、その中会から各地区教会に遣わされて行きます。また神様は、現代の教会から世界各地へ「宣教師」を遣わされます。そして、まだ福音が届けられていない国や民族へ働き人を遣わされるのです。さらに神様は、「信徒」をこの世の社会へと遣わされます。そして社会のあらゆる領域で、地の塩、世の光として生きて、人々が神様をあがめるようになることを求めておられるのです。

私たちは「使徒」ではありません。しかし神様は、私たち一人ひとりを、ふさわしい場へと遣わしてくださっているのではないのでしょうか。与えられた家庭や職場は、神様によって遣わされた場所であると受け止めて、そこで、イエス様の証人、地の塩また世の光として生きていくことが求められているのではないのでしょうか。

(2)教会

パウロは、コリント教会を「コリントにある神の教会」と呼びました。「教会」と訳された「エクレーシア」という言葉は、もともと「呼び集める」「招集する」という意味の言葉で、そこから一般の「集会」「人々の集まり」を意味する言葉となりました。

パウロは、教会を「神の教会」と書いています。つまり「神の集会」「神によって集められた集会」こそが、「教会」と言えるのです。教会は決して、自主的に集まった集まりではありません。決してキリスト教に興味がある人、聖書に興味がある人の集まりではありません。そうではなく、永遠の昔から神様によって選ばれ、イエス様の贖いを通して、神様に呼び集められた人々こそ、「教会」なのです。

教会は誰のものでしょうか。教会は、牧師のものでも、信徒のものでもありません。教会は、「神の教会」ですから、神様のものです。ですから私たちは、教会を自分たちの思い通りにしようとしてはなりません。教会は、神様のものですから、いつも「神様の御心」を求めていかなければなりません。「神様の御心」は「聖書」に書かれています。ですから「聖書」に堅く立つ教会こそ、「神の教会」となっていくのです。

(3)聖徒

またパウロは、アカイア地方全体のクリスチャンを「聖徒」と呼びました。「聖徒」という言葉は、もともと「切る」「分ける」という意味の言葉です。そこから神様に「聖別された者」「神様に献げられた者」という意味になりました。クリスチャンは、イエス様の贖いを通して、この世から切り分けられ、「神様のもの」とされた者たちです。その意味で、クリスチャンは「聖徒」なのです。この世から「聖別された者」という意味で、

「聖徒」なのです。

クリスチャンが「聖徒」であるということは、この世の中とは区別された明確な生き方をしなければならないということです。パウロはローマ 12：2 でこう言っています。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります」。クリスチャンは、この世の価値観に従って生きるのではなく、神様の御心に従って生きなければなりません。あらゆる選択の中で、何が神様の御心なのか、何が神様の喜ばれる道なのかを考えていかなければなりません。それこそが「聖徒」としてのクリスチャンの生き方なのです。

2. パウロによる祝福の祈り

2 節を見てみましょう。「**私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように**」。ここには、パウロによる祝福の祈りが書かれています。

(1) 私たちの父なる神と主イエス・キリスト

私たちの祝福は、「私たちの父なる神と主イエス・キリストから」与えられます。ここでは、神様を「私たちの父」と呼び、イエス様を「主」「キリスト」と呼んでいます。

私たちはもともと、神様を「私たちの父」と呼ぶことは許されませんでした。アダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食べた時から、私たち人間は皆、罪の性質を持ち、神様に祝福された状態から墮落したのです。その結果、神様を愛さず、人も愛さず、ただ自己中心に自分だけを愛して生きようになりました。そのため、神様との交わりを失い、罪に罪を重ねて、自分の身にあらゆる苦しみや悲しみ、肉体の死と永遠の地獄の刑罰を招くようになりました。私たちは、神様を親しく「父」と呼ぶことなどできなかったのです。

しかし神様は、イエス様をこの世に遣わし、十字架と復活によって私たちの罪を贖ってくださいました。ですから、もし私たちが、イエス様こそ神であり、私たちの「主」「キリスト」、つまり「救い主」であると信じ寄り頼むなら、私たちのすべての罪が赦され、神様の子どもとされ、神様を「父」と呼ぶことが許されるのです。

キリスト教の信仰は、ナザレのイエスとイスラエルの神をどのように見るかということと言えます。もしナザレのイエスを、「主」なる神であり、約束の救い主「キリスト」であると信じるなら、イスラエルの神が「私たちの父」となってくださるということなのです。神様を「私たちの父」と呼び、イエス様を「主キリスト」と呼ぶことこそ、キリスト教信仰の核心なのです。

(2) 恵み

神様を「私たちの父」と呼び、イエス様を「主キリスト」と呼ぶ時、私たちに「恵み」と「平安」が与えられます。「恵み」とは何でしょうか。パウロは、ローマ 4：4 でこう言っています。「**働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見な**

されます。「恵み」というのは、「報酬」と対比されます。「報酬」は、労働に対する報いです。何か良い行いをしたからこそ、当然与えられる報いです。しかし「恵み」は、労働も良い行いも何もしていない者が、ただ賜物として与えられるものです。つまり「プレゼント」です。私たちの救いは、私たちの良い行いに対する「報酬」ではなく、ただただ信仰による神様からの「プレゼント」なのです。

私たちの救いに必要なことは、イエス様がすべて十字架と復活において成し遂げてくださいました。私たちの代わりに神様に完全に従い、私たちの代わりに罪の罰を受けてくださいました。私たちはただ、神様から差し出された救いのプレゼントを、信仰によって受け取るだけです。私たちは、自分の救いのために、信仰以外に何もすることはできないのです。これが「恵み」というものです。

(3)平安

「平安」とは、単なる私たちの心の安らぎではありません。この言葉は、「平和」という意味です。私たちが本当の心の安らぎを見出すためには、神様との「平和」を見出さなければなりません。パウロは、ローマ5：1でこう言っています。「**私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています**」。先ほども言いましたが、私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持ち、神様との交わりを失いました。ただ単に神様との交わりを失っているだけでなく、神様の命令に背き、神様を愛さず、神様に敵対して歩んできたのです。そのため私たちは、神様の怒りと呪いのもとに置かれました。

私たちは、神様と和解しなければなりません。神様との平和を持たなければなりません。そうでなければ、私たちの良心には平和は訪れず、私たちの心は本当の意味で安らぎません。私たちは、イエス様を「主キリスト」と信じる時、神様を「私たちの父」と呼び、神様と和解し、神様との平和を得ることができるのです。パウロは、「**神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう**」(ローマ8：31)と言っています。私たちは、私たちの造り主である神様と和解し、神様を私たちの「味方」として歩むことこそが、本当の心の安らぎを得られる道なのです。全知全能の神様に敵対して歩んでも、私たちが勝てる可能性は一つもありません。私たちは、神様の御前に素直に降伏して、プレゼントとして差し出されているイエス様をただただ信じ受け入れ、神様と和解し、神様を「父」として、また「味方」として生きていくことこそが、本当の平和、本当の平安なのです。

ある人は、神様が与える本当の平安について、こう言いました。「**聖書の平安は、波風のたたない静かな湖水の表面のようなものではなく、嵐のたけり狂う中に揺れ動きながら、母鳥に守られた巣の中の小鳥の持っている平安である**」**神の平安が与えられたら、何事もなくなるのではなくて、どんな時にも神の守りを確信することができる、神が自分の見方であることを信じることができるようなものである**」。クリスチャンが持つ平安は、何も問題のない人生ではありません。そうではなく、次から次へと押し寄せる問題の中でも、心の底から安心できる安らぎなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、生まれながらに罪の性質を持ち、あなたに背き、あなたに敵対して歩んできました。しかしあなたは、イエス様の恵みによって、私たちに和解の手を差し伸べてくださいました。どうか私たちは、イエス様を「主キリスト」として信じ受け入れ、神様を「父」または「味方」として歩いていくことができますように。

またあなたは、私たちをこの世から選び出し、「聖徒」と呼び、「神の教会」の一員としてくださいました。どうか、この世の価値観に従うのではなく、あなたの御心に従って歩むことができますように。またこの世へと私たちを遣わして下さって、イエス・キリストの証人、地の塩、世の光として歩ませてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。